

欲求支援行動が課題学習へのエンゲージメントに及ぼす影響

—制御焦点に着目して—

肖 雨知¹ 外山美樹² 長峯聖人³ 三和秀平⁴ 湯 立⁵ 海沼 亮⁶ 相川 充⁷

^{1, 2, 3, 4, 5, 6, 7} 教育テスト研究センター ^{1, 3, 5, 6} 筑波大学人間総合科学研究科

⁴ 関西外国語大学外国語学部 ^{2, 7} 筑波大学人間系

本研究の目的は、課題学習へのエンゲージメントの4側面（感情的・行動的・状态的・認知的）に対して、欲求支援行動（自律性支援・関係性支援）と制御焦点（促進焦点・防止焦点）が与える影響について検討することであった。仮説は、促進焦点の高い個人が自律性支援を、防止焦点の高い個人が関係性支援を受けた場合、高いエンゲージメントを示すということであった。大学生 64 名に対して実験室実験を行った結果、課題へのエンゲージメントの認知的側面では、仮説の一部が支持され、防止焦点の高い実験参加者において、関係性支援条件は自律性支援条件に比べて得点が高かった。仮説が一部支持されなかった理由ならびに今後の展望について考察を行った。

キーワード：自律性支援，関係性支援，制御焦点，エンゲージメント

1. 問題と目的

学習場面におけるエンゲージメントの規定要因として、自己決定理論（Ryan & Deci, 2017）は、3つの基本的心理欲求（自律性・有能感・関係性）の充足につながる他者の欲求支援行動（自律性支援，有能感支援，ならびに関係性支援）が有効であるとしている（Ryan & Deci, 2017）。また、近年では、欲求支援行動の効果を調整する要因として、制御焦点理論が注目されている。制御焦点理論（Higgins, 1997）では、獲得の存在に接近して不在を回避しようとする「促進焦点」と、損失の存在を回避して不在に接近しようとする「防止焦点」の2種類の目標志向性が仮定されている。Hui, Molden, & Finkle (2013) は、恋愛関係を対象に欲求支援行動の効果における制御焦点の調整効果を検討した。その結果、促進焦点が高い場合、自律性支援が適応的な結果と結びつきやすい一方、防止焦点が高い場合、関係性支援が適応的な結果との関連が強くなることが明らかにされている。

上記の知見を踏まえると、他者との関わりが含まれる学習場面においても、制御焦点が欲求支援行動と適応的な結果との関連を調整することが考えられる。そこで、本研究では、課題学習に着目し、課題学習へのエンゲージメントの複数の側面に対して、欲求支援行動と制御焦点が与える影響を検討することを目的とする。外山（2018）は、エンゲージメントの下位側面として、感情的（学習者の感情的反応）、行動的（課題における関与、努力や持続性、忍耐）、状态的（課題に意義を感じ誇りやインスピレーションの感覚を伴う課題に関する強い関与）、そして認知的側面（深い学習方略や、自己調整方略の使用）をあげている。

本研究の仮説は以下の通りである。自律性支援を受けた場合、促進焦点の高い個人は防止焦点の高い個人より、課題へのエンゲージメントが高い（仮説1）。ならびに、関係性支援を受けた場合、防止焦点の高い個人は促進焦点の高い個人より、課題へのエンゲージメントが高い（仮説2）。

2. 方法

2.1 実験参加者と実験計画 本実験は、筑波大学人間系研究倫理委員会の承認を得た（課題番号：筑30-161）。大学生64名（男性32名，女性32名，平均年齢19.80歳， $SD=1.06$ ）が実験に参加した。実験計画は、欲求支援行動（自律性支援・関係性支援）と制御焦点（促進焦点・防止焦点）の2要因実験参加者間計画である。

2.2 使用尺度 (1) 制御焦点：Promotion/Prevention Focus Scaleの邦訳版（尾崎・唐沢，2011）を用いた（計16項目，7件法， $\alpha=.75, .82$ ）。促進焦点の得点から防止焦点の得点を引き，その差得点が中央値（ $Med=0.13$ ）より大きければ促進焦点群（ $n=31$ ），小さければ防止焦点群（ $n=33$ ）とした。(2) 基本的心理欲求の充足：Basic Psychological Need Satisfaction & Frustration Scaleの日本語版（Nishimura & Suzuki, 2016）の欲求充足に関する12項目を5件法で尋ねた（ $\alpha=.70\sim.74$ ）。(3) 英語の効力感：独自作成の2項目を7件法で尋ねた。(4) 英語の語彙力：「あなたの英語の語彙力は，大体どれくらいだと思いますか」と尋ねて回答を求めた。(5) 操作チェックの項目：Sheldon & Filak (2008)に基づいて作成し，6項目に対して5件法で評定を求めた。項目例は，自律性支援：「どの課題を選択するかは自分で決めることができた」，関係性支援：「インストラクターの話しかけ方が気に入らなかった」（逆転項目）などであった。(6) 課題へのエンゲージメント：外山 (2018) のエンゲージメント尺度を使用した。エンゲージメントの4側面（感情的・行動的・状态的・認知的）に対応する4つの下位尺度，計17項目から構成され，評定は7件法であった（ $\alpha=.75\sim.92$ ）。

2.3 実験手続き 実験手続きは，Sheldon & Filak (2008)に倣った。実験参加者は，ランダムに自律性支援条件（ $n=32$ ）か関係性支援条件（ $n=32$ ）に割り当てられた。実験課題は，英文字が含まれるマスにおいて3分の制限時間内に3文字以上の英単語を見つける「BOGGLE」というパズル課題であった。課題はプレ試行，本試行の計2回実施し，1回目の試行後に，うまく解くためのヒントについて説明を行った。使用尺度の(1)から(4)は課題の実施前に，(5)と(6)は実施後に回答を求め，課題を実施する間に，2つの条件の実験参加者に対してそれぞれ欲求支援行動の操作を行った。具体的には，自律性支援条件の実験参加者には，選択肢を与え，自発的な考えを促すような支援を与え，関係性支援条件での実験参加者には，実験参加者のことに関心や共感を示し，支持的な姿勢を示すような支援を与えた。

3. 結果

3.1 操作チェック 欲求支援行動ならびに制御焦点を独立変数とした分散分析を行った¹。その結果，自律性支援の3項目のうちの2つの項目においては，欲求支援行動の主効果がみられ（ $ps<.001$, $\eta_p^2s>.19$ ），自律性支援条件の方が関係性支援条件より有意に得点が高かった。一方，関係性支援の3項目のうちの1つにおいて，主効果は有意ではなかったが，小程度の効果量がみられ（ $p=.19$, $\eta_p^2=.03$ ），関係性支援条件は自律性支援条件より得点が高かった。

3.2 分析結果 欲求支援行動と制御焦点を独立変数，エンゲージメントの各下位尺度の得点を従属変数，基本的心理欲求の充足，英語の効力感，英語の語彙力を共変量として投入した共分散分析を各行った。エンゲージメントの感情的・行動的側面では，欲求支援行動と制御焦点の主効果はいずれも有意ではなく，交互作用も有意とならなかった（ $ps>.49$, $\eta_p^2s<.01$ ）。状态的側面では，欲求支援行動と制御焦点のいずれの主効果も有意ではなかったが，交互作用に関して小程度の効果量（ $p=.12$, $\eta_p^2=.04$ ）がみられたため，下位検定を行った。その結果，自律性支援条件における制御焦点の単純主効果は有意傾向であり（ $p=.08$, $\eta_p^2=.06$ ），防止焦点は促進焦点より得点が高かった。一方，関係性支援条件における制御焦点の単純主効果は

¹ 操作チェックの項目の α 係数は.50より下回り，合成変数を使用することは適切ではないと判断したため，項目ごとに分析を行った。

みられなかった ($p=.74, \eta_p^2<.01$) (Figure 1)。認知的側面では、欲求支援行動と制御焦点の主効果は有意とならず、交互作用は小程度の効果量 ($p=.19, \eta_p^2=.03$) がみられた。そこで、下位検定を行った結果、関係性支援条件における制御焦点の単純主効果は有意傾向であり ($p=.06, \eta_p^2=.06$)、防止焦点は促進焦点より得点が高かった。一方、自律性支援条件における制御焦点の単純主効果は有意ではなかった ($p=.77, \eta_p^2<.01$) (Figure 2)。

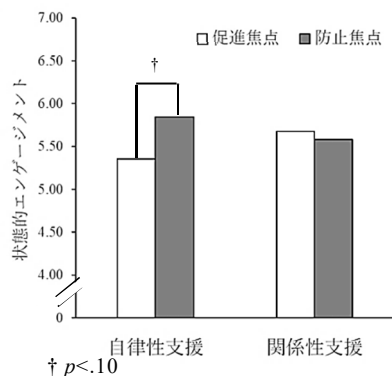


Figure 1 状态的エンゲージメントの結果

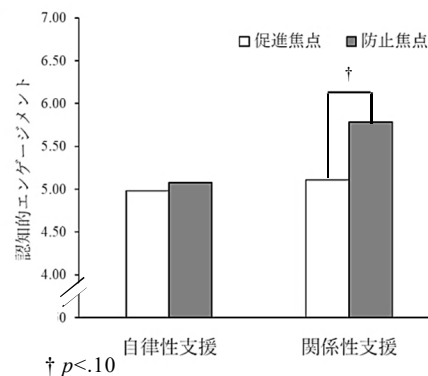


Figure 2 認知的エンゲージメントの結果

4. 考察

本研究は、課題学習場面の欲求支援行動における制御焦点の調整効果を検討した。分析の結果から、仮説2はエンゲージメントの認知的側面において支持された。防止焦点の個人は、安全や安心を支える欲求支援行動に価値を感じ、結果として、工夫をしながら課題に取り組んでいたことが考えられる。一方、仮説1ならびに仮説2の認知的側面以外の部分は支持されなかった。その理由として、条件の操作をあげたい。今回の実験では、両条件において、関係性支援の操作チェックの項目は理論的中央値よりも高い値がみられた。これは、自律性支援条件の参加者に対しても、関係性支援の操作が行われてしまっていたことが考えられる。これを踏まえると、自律性支援条件においては2つの欲求支援行動が共に操作されたことによって、仮説に合致した結果がみられなかった可能性がある。今後の研究では、欲求支援行動の操作を洗練化する必要がある。それによって、各従属変数における欲求支援行動と制御焦点の交互作用の詳細が明らかになることが期待される。

5. 引用文献

Higgins, E. T. (1997) Beyond pleasure and pain, *American Psychologist*, 52:1280-1300

Hui, C. M., Molden, D. C., & Finkel, E. J. (2013) Loving freedom: Concerns with promotion or prevention and the role of autonomy in relationship well-being, *Journal of Personality and Social Psychology*, 105:61-85

Nishimura, T., & Suzuki, M. (2016) Basic psychological need satisfaction and frustration in Japan: Controlling for the big five personality traits, *Japanese Psychological Research*, 58: 320-331

尾崎由佳・唐沢かおり (2011) 自己に対する評価と接近回避試行の関係性—制御焦点理論に基づく検討—, *心理学研究*, 82:450-458

Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2017) *Self-determination theory: Basic psychological needs in motivation, development, and wellness*. Guilford Publications

Sheldon, K. M., & Filak, V. (2008) Manipulating autonomy, competence, and relatedness support in a game-learning context: New evidence that all three needs matter, *British Journal of Social Psychology*, 47:267-283

外山美樹 (2018) 課題遂行におけるエンゲージメントがパフォーマンスに及ぼす影響—エンゲージメント尺度を作成して—, *筑波大学心理学研究*, 56:13-20

肖 雨知, 外山 美樹, 長峯 聖人, 三和 秀平, 湯 立, 海沼 亮, 相川 充